

踐此万歲

道母飲人

歲登成熟

海內皆臣

# 「秦漢時代の瓦当と磚文」

## ⑫ 「海内皆臣」十六字磚

図版③ 版式の異なる8種



図版② 主図版①の原磚



前回と同系であるが、更に「践此万歳」四文字が追加された十六字磚である。この十六字磚は、十数年前に突然西安の古玩市場に現れた。その当時、筆者も西安の数件の店で目にした。完全な物は、高価であったが、その拓本を各種求めた。その折、残片を幾つか目にしたので、この珍しい十六字磚の見本として求めた。思ひの外に安かった記憶がある。西安の碑林博物館の友人の馬驥氏が、市場に出回ったこの磚に関して詳細に調査した。その資料をもとに、この珍しい十六字磚を紹介しよう。出土地は、西安からほど近い、山西省臨汾市洪洞県であり、大きさは30cm×34cmの正方形、厚さ3~4cmである。陽刻、篆書体、型押しで製作されている。目にした100件ほどから同文の10余種の版式があり、書体、書風は莊嚴典雅にして伸びやかであり、また簡潔質朴でありながら装飾性に富んでおり、漢代人のもの作りの匠の素晴らしさを見ることができる。十六字の解釈について、始めの一句「海内皆臣」は、国内統一を指す。次の句「歲登成熟」は、年々五穀豊穣の意である。第三句「道毋飢人」の「飢」字は、「辞海」によれば「銅の字の異体字であり、人を食べさせることを表す。飢人とは、食べさせることが必要な人である。この句は、道路上に物乞いする人が無く、人々が皆安樂に生活することを意味する。最後の四句「践此万歳」の践の字は、踏むの意であり、脚でこの磚を踏むことは萬寿無疆（命が永遠に続くこと）である。十六字の吉祥語は、政治の安定、経済の繁栄、国民の安樂平和、皇帝の長寿を表している。

前回、「飢」字と訳した文字が、「飢」であり、古く青銅器の文字や印章にも使われ、人を食べさせることを表す意味で、後世使用されなく

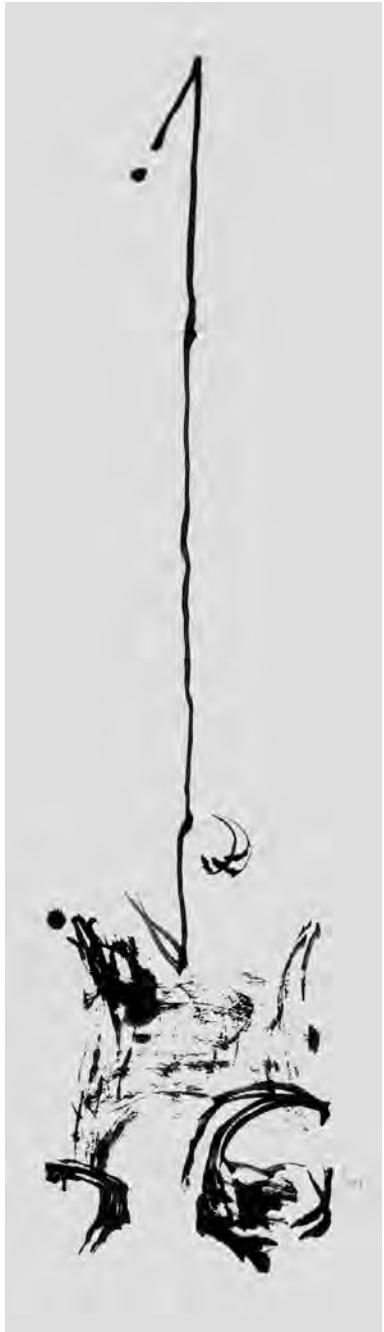
文字であると先人の研究を基に優れた見解を述べられている。

伊藤滋  
(書原名・木鶴室)

# 書道芸術院

## 平成の群像 (2017)

「寿ぐ」



佐藤幽香書



佐  
藤  
幽  
香

### 「前衛書との出会い」

子供の頃、習字教室に通うことが苦痛だった私がよくこれまで続けられていたものと今改めて思います。

良き師に出会い、沢山の仲間と共に学び思い出の詰まった時間が道を照らしてくれているからに違いありません。

それまでは現代詩文書部に所属していた私が前衛書を知ったのは、恩師である大内魯邦先生が門弟の指導に中島邑水先生をお招きしたことがきっかけでした。もう30年

以上前になるでしょうか。そこで中島先生の前衛書というものを拝見したのが始まりです。

文字を書きながら文字には見えない仕上り、黒い塊にしか見えない書、今までにない不思議な書。中島先生が大きな太い筆に墨をたっぷりと含ませ豪快にしかもリズミカルに筆を走らせる様子はとても楽しそうで「ほら、きれいでしょ。線はこのように書くんですよ」とジエスチャーやユーモアを交えながらのご指導は、私達を楽しませてくださいました。2日間の講習会は熱氣に帯び大盛会でした。中には夜も徹して書いている人も居る程で新しい書の世界に夢中になっていました。当時の前衛書のス

タイルは黒々と重量感のある作品に仕上げるものでした。そういう意識があり私も太い筆を数本揃えたのです。

その後何度も中島先生が私達の指導に来てくださり、その都度前衛書の楽しさに何だかわくわくしたものでした。しかし、見ているのは楽しいのですが実際に自分が作品制作するとなると容易なものではありません。私の場合は前衛書であつてもどこか文字の匂いを残したい思いがあり、古代文字の記号のような造形にはよく助けてもらっています。

今では前衛書のスタイルも時代と共に変化し個性溢れる作品が観る人を楽しませてくれます。筆・墨・用紙等に独自の研究をして、前衛書だから表現できる冒険と楽ししさ自由さがあるのも魅力です。

進めば進む程出口も遠くなつてゆく書の世界。多様な表現を可能とする新しい書の形、仲間と共に楽しみ、そして悩みながら学んで行きたいと思います。

今後ともご指導下さいますようよろしくお願いいたします。

# 書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

## 書道芸術院秋季展

## 書道芸術院創立70周年記念 役員作品巡回展・山陰支局展 開催

## 創立70周年記念事業のメインともい うべき役員作品全国巡回展は11月2日 から5日まで、鳥取県倉吉市倉吉博物 館での山陰支局展でフィナーレを迎 えた。会場の倉吉市博物館は先般の直下 型地震での被害、損傷を乗り越え再開 されており、開催当事者のご苦労は大 変なものがあつたとお察しした。

11月4日担当理事の理事長、後藤大  
峰常務理事、最首翠風、川島舟錦各理  
事、山口仙草事務局長、さらに岡山か  
ら小竹石雲常務理事も駆けつけ午後会  
場にて作品解説および席上揮毫を行つ  
た。山陰支局長名越蒼竹、竹本龍汀各  
氏も巡回展出品として解説及び席上  
揮毫も行つていただいた。

作品解説会は理事長から院の歴史、  
組織、運営方針など基本的な解説、担  
当理事ほか出席理事員からそれぞれ  
の作品の主張、部門の特徴などを出品  
作品とともに具体的な解説を行つた。  
席上揮毫では半切・全紙・毎日展サ  
イズなど多彩な形式と表現内容で参觀  
者の目を惹きつけ大好評であった。名  
越支局長から特に現代詩文書表現につ

いてご指導をとの要請があり、理事長  
著作の「感動を呼ぶ漢字かな交じり書」  
をテキストとしてご用意していただき  
たがサインで済ませてしまい申し訳な  
かった。  
午後3時より会場を移し祝賀懇親会  
が地元のご来賓多数をお招きして開催  
され、幕開けの大鼓演奏で賑やかにま  
た盛大に行われた。2次会までご用意  
いただき大いに盛り上がった。



席上揮毫にて

## 創立記念日講演会盛況に開催 定例理事会も併せて開催

11月23日は本院が昭和22年に創立さ  
れた記念日である。例年この佳き日に  
著名文化人識者による講演会を開催し

ているが、本年は日展理事・大東文化  
大学名誉教授・謙慎書道会顧問の新井  
光風先生を講師にお招きし「戦国・秦

の木竹簡にみる字形変遷の実態」字形  
イズなど多彩な形式と表現内容で参觀  
者の目を惹きつけ大好評であった。名  
越支局長から特に現代詩文書表現につ

はどうして変わるものか」と題して、  
スライド映写をもとに内容の濃い充実  
した講演を拝聴した。

会場は東京上野公園精養軒。当日午  
前中は公益財団法人定例理事会を顧問、  
評議員にオブザーバー参加していただ  
き開催した。詳細は次号の院報にて。

主な議事

- ・第71回書道芸術院展美施概要
- ・企画委員会報告
- ・第69回全国学生書道展審査結果他
- ・平成30年度単位認定講習会（高知）
- ・講師・開催要項

- ・第71回書道芸術院展評論家の日
- ・70回記念全国巡回展、秋季展など

- ・企画委員会報告
- ・70回記念全国巡回展、秋季展など



新井光風先生による講演

午後2時からの講演会は会場いっぱ  
いの250名余の参加者で用意した座席が

足りなくなるほどであった。講演内容  
は次号にて詳細を報告予定。

講演会終了後新井先生をお招きし創

立記念日を祝う祝賀懇親会が賑やかに  
開催された。ご来賓の毎日書道会西村  
修一専務理事のご発声で乾杯、恒例の  
各総支局代表の近況報告は主に役員作  
品巡回展の開催状況などを中心に多彩  
充実の報告であった。また毎日新春展、  
現代書道20人展初出品の下谷洋子さん、  
現代女流書展出品者など各種の紹介宣  
伝も賑やかに行われ最後は小伏竹村顧  
問の力強いご挨拶で閉会となつた。

## 全日本書道連盟講演会 中国大使館陳譯文化担当参事官講演

11月15日、日展開催中の国立新美術  
館講堂にて「中日文化交流最新情報」  
と題して多彩な内容を主にスライド映  
写で具体的にお話しいただいた。会場  
いっぱいの220名余の聴衆で盛況であ  
った。

## 生誕100年青木香流遺墨展開催

10月24日より29日まで東京銀座セン  
トラルミュージアムにて没後100年を記  
念して近代詩文書のパイオニア青木香  
流先生の遺墨展が盛大に開催された。  
代表的な大作、津軽ジョンカラ三部作、  
「ゆき」など久しぶりに青木香流書の  
ワールドを拝見。28日にはギャラリー  
トークを船本芳雲氏と大雲が大勢の観  
客を前にご披露、楽しいひと時であ  
った。

漢字(三)

小伏小扇

現代詩文書

西岡雨瑠

### 甲骨文の書表現(三)

先人の臨書を参考にしますと董作賓のものは、線条の終筆部分は細く鋭くなっています。また短い横画の終筆は止めないで抜いています。転折は切らすに続けていますが甲骨拓を拡大して観察しますと、一本一本の線条は、それぞれ転折部分で止まっています。「月」の書は、かなり初步的段階ですが、この方法は甲骨文を素材とした作品創作には、大いに利用できる生きた手法です。

甲骨文を臨書することは、

ノ意を筆意に發揮すべしに一

自然美を求めて  
師走の風は、やがて雪となり、  
銀世界の舞台となる。

一体化するから、詩情と祈りが作品制作に内蔵していくのだと思う。

なっています。また短い横画の終筆は止めないで抜いています。転折は切らずに続けていますが甲骨拓を拡大して観察しますと、一本一本の線条は、それぞれ転折部分で止まっています。「月」の書は、かなり初步的段階ですが、この方法は甲骨文を素材とした作品創作には、大いに利用できる生きた手法です。

書の用筆法の使用が考えられます。伝統の執筆では、直筆・側筆があり、始筆には露鋒と藏鋒があります。さらに送筆には円筆・方筆、粘転性の強い線などがあります。また波法については、伸びやかで擦の長いもの、剛直で捺の短く重厚なもの、三波法を用いたものなどがあります。

「白と黒の融合・攻めぎ合い」は美に直結する。極限の美がそこに誕生する。

銀色に満ちた冬。吹雪の止んだ朝、キラキラ輝く天空から舞い降りるパウダースノーの結晶美は、北に生きる人間でないと感じない。どの宝石より美しい。

こんな時こそ「詩の余情、余韻の世界」を求める。その中心軸に「濃淡の変化、黒色の魅力」がある。

「白」と「構成」を求めてさまよふ船のようなもの。自然界に美の追求を。北の大地は春までゆっくり冬眠。

伊藤整の詩である。彼は、小樽の近い塩谷岬—ゴロタの丘で詩作した。冬の木枯し、雪明りの路を歩き、強靭な北を知り尽くした詩を素材に。まず、縱に流れる「流动感」と余白を生かす墨色の变幻自在に思いをこめて「天から」の便り」を析る思いで仕上げた作品である。もし現代の今も雪を語ってくれるとしたら、その思いが届くであろうか。現代詩文書の誕生の秘密は、そこに存在する「光と風」。大先達の書の冒險者たちは、皆夫々、その尊い感性を一作に残して旅立つた。「生命的光」を我々にぎざませた。感謝の気持でいっぱいである。静かに雪が降り始めた午後のこと。



刻意と筆意  
を融合させ、  
調和の美しさ  
を表現すること  
が課題とな  
ります。

小伏小扇書

「春を待つ（伊藤整）」

西岡雨瑤書

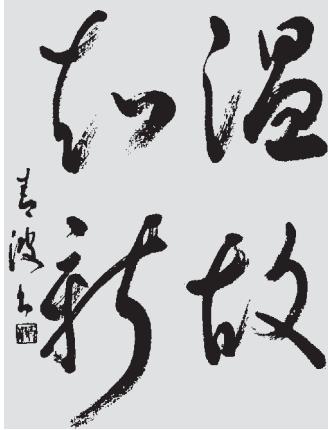
平成29年度 新審査会員作品

II

三船青波（漢）・尾形大山（漢）・藤村昌子（か）・土屋明珠（現）

三船青波  
(千葉)

「温故知新」



子どものP.T.Aの書道サークルで種谷扇舟先生と出会い、私の考えが一変致しました。古典を勉強しながら、個性を生かすというその教えは萬城先生からも頂いており、心の支えとなっています。さらに、諸先生や先輩、友人達のお蔭で今があります。心より感謝致します。  
(青波)



尾形大山  
(長野)

「道」



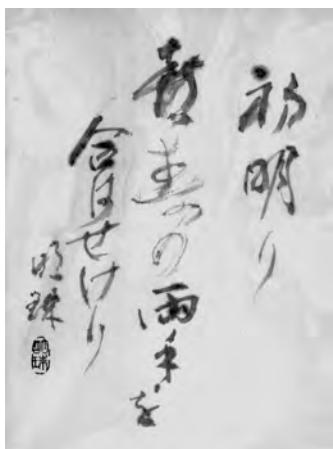
この度は審査会員にご推挙いただき身に余る光榮です。ご指導いただいた小浜大明先生はじめ諸先生方に心より感謝申上げます。今だに思い通りの作品が書けませんが、命ある限り書の道を追求してまいる所存です。  
(大山)



藤村昌子  
(埼玉)

「雪のうちに」

この度は審査会員に昇格させて頂き、ありがとうございます。また、日頃よりご指導いただいている石井明子先生をはじめ、諸先生方のお陰と深く感謝いたしております。これからも美しく魅力ある書を目指し、精進努力して参りたいと思います。  
(昌子)



土屋明珠  
(千葉)

「初明り 喜寿の両手を合はせけり」  
明珠（正月三日詠）

「集字聖教序から明珠」と、種谷扇舟先生から勿体無い授号。高野山講習会で先生方の運筆や呼吸迄感動、以来幾星霜、芸術院一白扇会で有り難い御指導を戴き今があります。折々を句に詠み書にする幸に感謝し、ご推挙に恥じぬ様精進努力して参ります。（明珠）

# 書道芸術院創立70周年記念

## 役員作品巡回展

### 併催 東京総局展

会期 平成29年10月3日(火)～8日(日)  
会場 銀座フェニックスホール

実行委員長（東京総局長）

石井明子

会期は毎年開催されている秋季展と同時期でした。会場は今回が初めての、銀座フェニックスプラザ（秋季展と同じビルの2階）でした。  
昨年2月書道芸術院展終了後、馨香会、白扇会、書泉会、玉松会のメンバーで6名の運営委員会を立ちあげました。5年前の総局展の経験者も多く、記録も残されていて大変助かりました。出品者は、地域的に出品料が高額になることを考慮して、各社中に広く呼びかけ、名誉会員、参与会員以下113名の参加となりました。

会場のスペースを考え、表具店との打合わせで、縦横自由、一律半紙額と致しました。公募展で大作が当たり前になっている人達には身近に置いて親しめる小品の制作は楽しい仕事となり、大変歓迎されました。

会場は本来、展覧会場として作られた場ではないため、パネル設営、照明

等の会場づくりから始まりました。役員作品巡回展は一部2段掛け、東京総局展は名譽会員、参与会員以外は2段掛けの展示としました。大変見易く、雰囲気の良い会場となりました。

秋季展と同時開催で、初日午後の表彰式と研究会のため、東京総局としての特別な企画は時間的に不可能でした。秋季展の審査会員候補の公募の表彰式に続く研究会では、アートサロン毎日に出品された推薦作家5名、秋季菊花賞受賞者の方々の喜びの声と制作に対する熱い思いをそれぞれ伺うことができました。その上、それに対する各部の先生方のコメントが濃密で興奮の渦に引き込まれる思いでした。もつと広い会場で多くの人に開かれた場であつたら…と大変勿体ない気がしました。1年に一度でなく、このような形で刺激しあえる場が持てる方法はないものかとも感じました。作品を創るだけなく、大勢の人の前で話すことで自分の書を表現し伝えていくことは、文章にするのと同様に重要なことと感

じました。

秋季展と合同の祝賀懇親会は、外部から全日本書道連盟理事長をはじめ、各団体の重鎮の書家、評論家、業界誌

平素お世話になっている書道関係のあらゆる分野の方々をお招きしました。私たち東京総局出品者も多数の出席で200名を超える賑やかな会となりました。

会期中、約650名がフェニックスホールにお出かけ下さり嬉しいことでした。

何故か秋季展入場者数より少なかつたことは残念で、次回への課題として残りました。

ご協力いただきましたすべての方々に心から感謝し、お礼を申し上げます。



巡回展・東京総局展 受付



フェニックスプラザ 受付



巡回展風景②



巡回展風景①



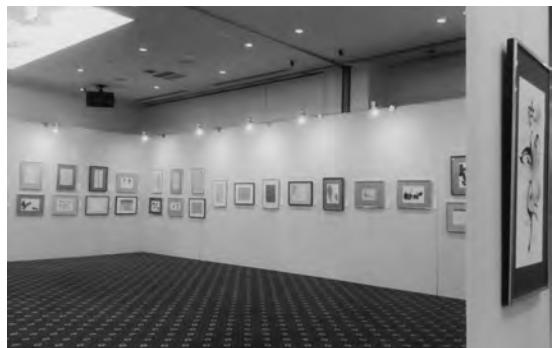
巡回展風景④



巡回展風景③



東京総局展 陳列風景



東京総局展 名誉会員・参与会員作品



巡回展・東京総局展会場



東京総局展 会場風景



東京総局展会場

## 書道芸術院創立70周年記念

# 役員作品巡回展

併催 鳥取県中央書道連盟40周年

## 記念会員作品展

会期 平成29年11月2日(木)～5日(日)  
会場 倉吉博物館

行なわれました。最初辻元理事長によ  
る院の歴史を踏まえた全体的な解説が  
行なわれ、続いて小竹・後藤常務理事、  
最首理事、川島監事、山口参事よりご  
自分の作品を中心に作品に対する思い  
や見どころを語っていただきました。  
名越は特に落款や雅印について、巡回  
展の作品から多くのことを学び取って  
欲しい旨、山陰支局の会員に向けて話  
をいたしました。

### 【研究会】

実行委員長（山陰支局長）  
名 越 苍 竹

約1年前、鳥取県中部は震度6弱の  
地震に見舞われました。現在もその爪  
痕は若干残っているものの、当時いち  
早く芸術院からはお見舞いの一報を頂  
戴し、感謝しております。今回の巡回  
展は山陰の地が締めくくりとなりまし  
たが、復興を記念する展覧会ともなり、  
盛会のうちに幕を閉じることができます  
した。

鳥取県書道界は毎日系・読売系とも  
に協力しながら活動しています。しか  
し前衛書は皆無に等しく、書道展の全  
ジャンルが一度に鑑賞できる書道芸術  
院の役員作品巡回展は、県内の人々に  
とつて貴重な鑑賞の機会となりました。  
【作品解説会】  
11月4日午後2時30分から予定より  
少し多めの時間を持って作品解説会が

作品解説会に続いて辻元理事長の著  
書『感動を与える漢字かな交じり書』  
をテキストに研究会を行ないました。  
最初に辻元理事長がテキストを参考に  
揮毫され、説明を加えましたが、  
折角の機会ということで他の役員の先  
生方にも揮毫をお願いし、支局の会員  
にとっては当地では見慣れない書風の  
リズム感や筆遣いに触れ、大いに刺激  
を受けることができたと思います。特  
に山口参事が即興で段ボールをちぎっ  
て筆代わりとし、一気に前衛書を書か  
れた時は、目を白黒させていました。  
最後はテキストにサインをしてくださ  
るというので長い行列ができ、辻元理  
事長には時間いっぱいまでサービスし  
ていただきました。

一郎様、鳥取県書道連合会会長柴山抱  
海様から祝辞を頂き、地元打吹太鼓の  
迫力ある祝演奏の後、小竹常務理事に  
よる乾杯のご発声で祝宴が開始されま  
した。途中、倉吉市議会議長坂井徹様  
スピーチを頂戴し、終始和やかな雰囲  
気で進行。最首理事からの歌集のプレ  
ゼント紹介、揮毫会での作品をじゅん  
けん勝者にプレゼントする場面では大  
いに盛り上がり、後藤常務理事による  
万歳三唱でお開きとなりました。  
最後になりましたが、本展を開催す  
るにあたり、本部役員の方々をはじめ、  
他の総局支局の皆様からの様々なご声  
援に感謝申し上げます。



巡回展作品の解説 後藤大峰常務理事



研究会 開会前の辻元大雲理事長のことば



山陰支局選抜展



研究会 川島舟錦監事による揮毫



研究会 小竹石雲常務理事による揮毫



研究会 講師・辻元理事長によるサイン会



研究会 山口仙草参事による揮毫



懇親会  
著作の歌集をプレゼントされた  
最首理事のあいさつ



懇親会 地元打吹太鼓による祝演奏



懇親会  
揮毫いただいた作品をじゃんけん大会でプレゼント

# (公財)書道芸術院 創立70周年記念・国際交流ウィーン展

## 第20回記念・国際交流ウィーン書道展

実行委員長

下 谷 洋 子

芸術の国と言われるオーストリア、

その中でもとりわけ整然と美しい街ヴィーンで、10年振りに芸術院の多彩な書が披露された。芸術院創立70周年を記念してのワイン展と、20年に亘りワインで国際交流を続けて来た谷脇梅翠先生による記念ワイン書道展が、同時に開催となつた。

ヘルナルス市民大学に飾られた財団役員と訪壇された方々の作品は、それぞれ軸や額装となり、書という狭い枠に収まらないほど大きな宇宙観を見せていた。開幕式から席上揮毫、2回に亘る大人と子供のワークショップ、何れも、ワインの人々は一本の筆がもたらすしなやかなマジックに目を凝らし、或いは操りながら筆の行き先を楽しんでいた。



会場風景

業が丁寧に和やかに行われた。リピーターも多かったと聞くが、20年もの長い間、書文化の普及に努められていた谷脇先生のご功績に改めて敬意を表します。

海外展は、現地に行ってみないと解らない事が多いが、今回もいくつか難はあつたが、先発隊、後発隊、そして本部役員とともに協力し合い、芸術院ならではの国際交流が、無事に滞りなく行なわれた事に、関係者の先生方に心から感謝申し上げます。

ワークショップで書を書きあげて浮かべた笑顔と展示作品に感嘆の声をあげていたワインの人々、その光景が昨日のように浮かぶ。



ワークショップ風景1



日本大使館大使公邸にて大使と



ワークショップ風景3



ワークショップ風景2

## A班・班長

### 小竹石雲

ウイーン滞在6（5）日間のA班は各総支局より総勢26名が参加しました。とりわけ団長の谷脇梅翠先生は、卒寿を迎えてのご参加で20年にわたり当地との交流を通しての書展を開催してこられました。そのバイタリティ溢れる気力には一同敬服いたしました。

10月17日の夕刻、フランクフルト経由でウイーンにほぼ予定通り無事到着、時差7時間（巻き戻し）の長い一日で

18日からは、行事に観光にと充実したスケジュールが組まれており、人々との交流を始め様々な角度からウイーンを楽しむことができました。

ウイーン市、ヘルナルス市民大学での書展は、18日に本部団員を中心地元の協力を得ながら展示しました。ワ

クショップでは辻元先生の文字の成り立ちの説明の後、子どもから大人までの熱心な方々が思い思いの文字書き上げていました。さすが歴史と文化の街、市民の異文化に対する意識の高さに舌を巻きました。参加員も助講師としてサポートし、交流の輪が広がりました。

開会式は、在奥日本大使館特命全権大使の小井沼紀芳様、ヘルナルス市民

第17回区長エリザベート・ローラン様などにご臨席いただいて行われました。

その後、松村くに子先生、川島舟錦先

生、前田龍雲先生、大平邑峰先生、板垣洞仙先生による席上揮毫が行われ、

実際に揮毫する姿を多くの現地の方々にも見ていただき事ができ大変有意義でした。夜の夕食会は、日本大使館広報担当の書記官の方をお招きして、バ

イオリンとアコーディオンの生演奏もあり終始暖やかに懇親を深めることができました。

19日からは主に観光、ハプスブルク家にまつわる拘りぬいて建てられた宮殿や美術館、聳え立つ教会、街全体が世界遺産たる由縁を体感できました。

また、美しい空と大地のウイーンの森やバッファウ渓谷とドナウ川のクルーズでは、日本とは異なる紅葉の大それと農村風景を名産の白ワインとともに満喫しました。オペラやオペレッタの観劇が組まれウイーン最後の夜を楽しみました。

21日、あっという間に日は過ぎて帰国途に。日本は折しも台風襲来、羽田からの各地への便で欠航や引き返しもあり大変でしたが、たくさん思い出と出逢いを胸に全員無事帰宅することができました。

## A班・班長

### 板垣洞仙



ワークショップ風景



シェーンブルン宮殿

高知・伊丹・富山の各空港から12名そして関係者6名の計18名が羽田空港に集合して一路ミュンヘン空港へ飛び立った。朝早い出発だったので、班全員が顔を合わせることもなく人数確認のみのちょっと不安な出発であった。しかし、ミュンヘン空港で乗継ぎウイーン空港に着いた頃にはどこからともなく明るい声や笑い声が聞えていた。

旅行会社等の資料では、気候については日本が6～7度高めと記載されていた。日本を出る頃、東京はかなりの寒さであったので、セーター等を多めに持って行つたが無駄だった。ウイーンの方が暖かく気持ちよく行動しやすかった。

2日目は午前中ウイーン市内、午後3時頃からヘルナルス市民大学にてワクショップ・ウイーン展作品観学、オーブングセレモニー・祝賀会に参加した。（詳細は団本部の報告に）

3日目は世界遺産のシェーンブルン宮殿見学、壮大な庭園の美しさや内部の優雅なロココの家具、シャンデリアや天井画に心奪われた。午後はウイーンの森を観光した。夕食は、日本料理店「日本橋」での楽しい宴があった。

クに向った。途中古城渓谷ドナウ川で遊覧船に乗り、小竹石雲先生の班と共に美しい両岸の景色を眺めながら、和やかにゆったりと時を楽しんだ。

5日目はザルツブルク市内観光ではモーツアルトの生家等を見学し、市内散策して楽しんだ。また「サウンド・オブ・ミュージック」の映画にゆかりのあるミラベル庭園等や美しい風景に感動を受けた。そして、その後ミュンヘン空港に向かい帰国途についた。

6日目、羽田空港に着陸時間帯は台風が日本に近づく頃であった。機体は多少揺れたが班全員笑顔で帰国した。しかし、国内線は欠航が多く、帰宅するのに大変な思いをされた方も多いらっしゃったようである。



開幕式後のデモンストレーション1



ミラベル庭園



開幕式後のデモンストレーション2

東北総局会員を主体とした本団B班は10月23日、台風一過の羽田空港を出発しました。参加された方は他に毎日新聞社学芸部、桐山記者と毎日旅行社の北川さんの11人。

ミュンヘン空港に到着後、飛行機を乗り換え、ウイーンへ。ホテル到着、辻元理事長、下谷常務理事の出迎えを頂きました。夜も更けて居りましたので部屋に入り就寝、翌日に備えました。

抜けるような青空となった2日目、国際交流ワイン書道展の会場、在オーストリア国日本大使館日本広報文化センターを訪れ、見学。センター長の岩渕二等書記官、職員のベッティーナ・ダクラさんと親しく懇談。特に岩渕さんは仙台のご出身とのこと、しかも筆者との近所とのことで、だいぶ話が弾みました。

その後、広報文化センターを後にし、市内観光に向かい、世界遺産シェーンブルン宮殿を見学、ワインの歴史を感じ取りました。一日中歩き回り疲労困憊、その疲れを癒やすのは、これまでの歴史のあるワイン専門店にて夕食、色々なワインの歴史を体験し2日目を終えました。

3日目、この日はB班のメイン行事

## B班・班長 後藤大峰

4日目は終日、観光。ドナウ川遊覧に向かいました。観光船にて歴史ある古城修道院を見学。また、美味しい昼食、晚餐に舌鼓。モーツアルトの故郷ザルツブルクに入りました。翌日、モーツアルトの生家、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の撮影の地「ミラベル庭園」を散策。夕刻、ミュンヘンに移動。帰国途に就きました。

今回、創立70周年記念「オーストリア・ワイン展」に参加致しまして、一連の行事に関わるいつもとは異なる体験をし、ワインの歴史ある建物、風土、それに付随する環境に触れ、大変実のある旅行でした。最後にこれらを企画頂いた辻元理事長はじめ役員各位に感謝し終章と致します。

のヘルナルス市民大学でのワークショップ、この日は小学生を対象。毛筆を使う事は初めてではあるが、東京・府中市とウィーン市は姉妹都市提携をしているとの事で日本文化には折々触れており、子供たちは興味津々であった。辻元理事長の解説、揮毫が始まると、子供たちからは歓声が上がりました。その後、「花」「山」等を楽しそうに書き上げ、我々参加者も筆を執りワークショップは大いに盛り上がりを見ました。午後は前日に続いて観光に向かい、ワインの森、ハイリゲンクロイツ修道院などを見学、夜は日本料理レストランにて夕食、3日目の夜は更けていました。



ミラベル庭園



ワークショップ風景

△団員表▼

澤田	松浦	塚本	大石	川島	小幡	麻生	班長	◇A班	佐藤	武山	谷脇	大橋	川島	九條	藤原	大平	糸賀	班長	◇A班	顧問	藤和額装	本部団員	副団長	団長	総団長
義則	錦扇	真仙	仙岳	舟錦	華恵	泰久	板垣	10 / 6	17	10 / 17	17	10 / 22	22	10 / 21	21	10 / 22	(5)	10 / 21	21	桐山	前田	下谷	谷脇	辻元	
澤田	石川	大野	大石	上岡	積田	奈良	洞仙	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	(5)	10 / 22	22	正寿	泰久	洋子	梅翠	大雲	
芳美	渢華	礼子	栄子	まゆみ	惠雲	清扇	扇	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	(5)	10 / 22	22	泰久	糸賀	龍雲	洞仙	川島	
井戸	山田	上田	岩原	麻生	小関	瑞華	三扇	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	22	10 / 22	(5)	10 / 22	22	靖夫	舟錦	舟錦	舟錦	舟錦	

△B班 ウィーン・ザルツブルク展 日程表

2017年	展示会全体スケジュール		グループ別スケジュール		班長	6日間
	ヘルナス区市民大学	広報文化センター	A-1	A-2	A-3	
10/17 (火)						
10/18 (水)	15:00~17:00 ワークショップ①	10:00~ 開幕式・席上講話 19:00~ カクテルパーティー	②創立70周年記念・書道芸術院院長 【午前】 【午後】ヘルナス区・市民大学にてワークショップ見学、作品見学 【夕刻】オープニングセレモニー(ヘルナス区市民大学)及び席上講話見学 【夜】祝賀会(パーティ)		ウイーン泊	
10/19 (木)		14:00~18:00 ワークショップ②	③シェーンブルン宮殿&ワインの晩餐会		ウイーン泊	
10/20 (金)		14:00~16:00 ワークショップ③	④出発まで自由行動(オブショナルツアーなど) ウイーン+ヨーロッパ都市経由	⑤バッファウ渓谷とドナウ河谷 ルーズ観光	世界遺産ハルシュタット鉱泉 ザルツブルグ	
10/21 (土)				⑥羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	⑦出発まで自由行動(オブショナルツアーなど) ウイーン+ヨーロッパ都市経由	ザルツブルグ泊
10/22 (日)				⑧羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	⑨出発まで自由行動(オブショナルツアーなど) ウイーン+ヨーロッパ都市経由	ザルツブルグ+ヨーロッパ都市 市経由
10/23 (月)			⑩羽田+ヨーロッパ都市経由 ウイーンホテル	⑪羽田+ヨーロッパ都市経由 ウイーン泊	⑫羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	ザルツブルグ+ヨーロッパ都市 市経由
10/24 (火)			⑫創立70周年記念・書道芸術院院長 【午前】 【午後】ヘルナス区・市民大学にてワークショップ見学、作品見学 【夕刻】オープニングセレモニー(ヘルナス区市民大学)及び席上講話見学 【夜】祝賀会(パーティ)		ウイーン泊	
10/25 (水)	10:00~12:00 ワークショップ④ 撤収		⑬シェーンブルン宮殿&ワインの晩餐会		ウイーン泊	
10/26 (木)			⑭出発まで自由行動(オブショナルツアーなど) ウイーン+ヨーロッパ都市経由	⑮バッファウ渓谷とドナウ河谷 ルーズ観光	世界遺産ハルシュタット鉱泉 ザルツブルグ	
10/27 (金)			⑯羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	⑰出発まで自由行動(オブショナルツアーなど) ウイーン+ヨーロッパ都市経由	ザルツブルグ+ヨーロッパ都市 市経由	
10/28 (土)			⑱羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	⑲羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	⑳羽田、着後解散 羽田より国内線にて各地へ	

△B班 ウィーン・ザルツブルク展 日程表

桐山	大里	正寿	太田
宗苑	順風	・伊藤	
千葉	・千葉		
蒼玄	・今村	蓮紅	一條
工藤	青華	・紅蘿	
永翠	・青華		

伊都内親王願文 (平安・伝 橋逸勢)

③

## 漢字研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

当該古典の左記掲載  
部分以外も可。

## 特別研究部臨書課題

II (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)

整汎俱生受河慧

柯一飛便超苦海空

者二緣真悟並照

六度圓滿三明洞

(掲載図版65%縮小)

※落款を必ず入れる。  
 署名、もしくは○○臨  
 (押印のみ可)

〈解説〉 橋逸勢 (778~842?)

は、延暦23年(804)からおよそ2年間、空海・最澄らとともに遣唐使として唐に渡った。そこで、多くの書を学び、とくに王羲之・王献之・李北海・顏真卿の影響を受けた。唐人は逸勢を橋秀才と賞賛したといふ。

逸勢の真跡として確認できるものは今日ほとんど伝っていない。その中で、空海の三十帖冊子の一部分、興福寺南田堂銅燈台銘、伊都内親王願文が逸勢の筆とされているが確証はない。後世、空海・嵯峨天皇とともに三筆と称せられている。

(編集部)

暫汎、俱出<sup>二</sup>愛河、慧<sup>一</sup>柯<sup>一</sup>飛、便超<sup>二</sup>苦海、空<sup>一</sup>有<sup>二</sup>緣、真俗並照、<sup>一</sup>六度圓滿、<sup>二</sup>三明洞

宮内庁保管

※古書は原本(古文書)と翻訳版は85枚です。

(個人蔵)※掲載図版は85枚です。

に至っています。戦後個人蔵となつて今日手した。益田鈴翁(1884~1938)が入経営者・益田鈴翁(1884~1938)が入美(師)を介して三井財閥の不明ながら、古書に詳しい田中親家に伝来していたもので、時期はこの一条摺政集は、会津の松平半であると考えられる。

より前の江戸時代から12世紀前までといふが、西行の真跡と確認似していりながら、西行の模倣書風とも類

円位(西行)の模倣書風と「消費息」や「品経和歌紙」の書風によく似てゐる。西行集切札の形冊子本の「曾」丹集切札の摺政集は、伝西行筆「中務集」

<解説>著者は西行と云ふのでこの一条

かへし

らむ

ぬる

かへ

をしむしの心

なま

いであやしけ

めりけむ、つとめ

さに

へし

おひおもはず

まか

かへ

たま

かねとあは

ば

こく

かへ

なり

るはおもとじひ

まつ

より

ひさしとば

え

かす

ひさ

て、女

かへ

し、

さわ

かへ

む

かへ

す

ひ

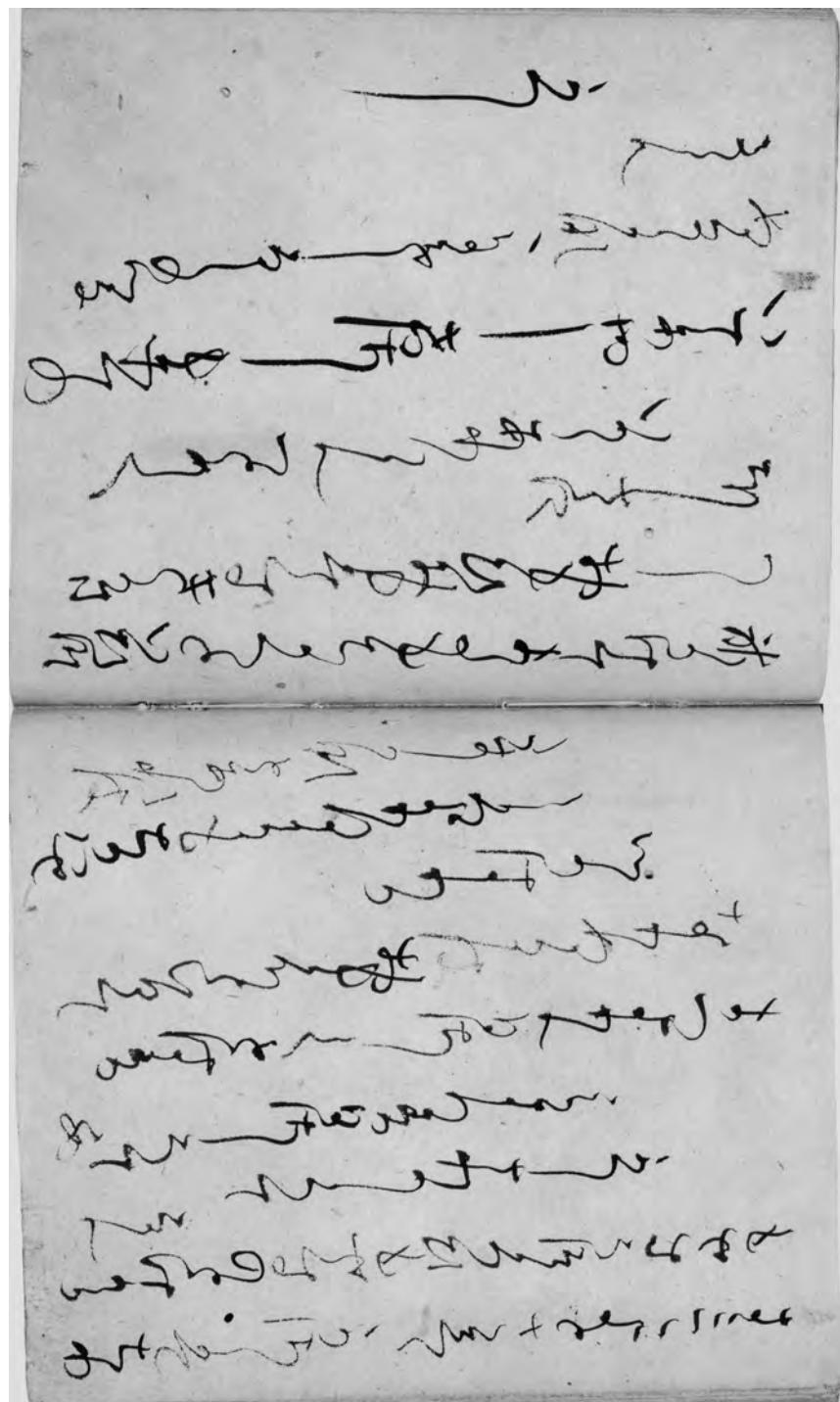
す

のじけ

わ

ら

利



※古筆鑑賞賞受賞。書名: 一 条 摺政集(古文書)。

古筆鑑賞賞  
一 条 摺政集(古文書)  
3)

臨書課題  
特別研究部

左記の掲載以外可。

(毎日展公募サイン入り 内・鑑賞白田)

臨書課題  
かな研究部

165

左記の古書の鑑賞用分冊り書一冊(古文書)へ郵便料金。(古文書)

長崎賞賞(古文書)・鑑賞品。書名(古文書)

習い方解説 (三)

最首翠風

形直影端  
(形直ければ影端し)  
(禅語)

草書を中心としました。草書のみでまとめるにメリハリがあり難く、一般には行草体という混合体が多く書かれています。

楷・行・草とよく言いますが、

草書体は行書体から生まれたものではなく、既に秦代の隸書以前の戦国時代の篆書中に胎動の時期がありました。そして前漢の木簡には現在使われている草書体が多く見られます。草書体は早く書く為に便利なのですが読みづらいのが難点でしょう。しかし、文化を継承して行く為には少なくとも書にかかる私達だけでも基本的な草書体は覚えたいものです。

・草書体の古典名品

十七帖(王羲之)書譜(孫過庭)  
自叙帖・千金帖(懷素)王鐸を中心とする明清の諸帖

形直影端 よみ(形直ければ影端し)

書体=自由



習い方解説 (三)

千葉蒼玄

千思万考

(蘇東坡)

思いをめぐらしじっくりと考  
える。

今月は六朝時代の造像記の用筆を基にしてみた。三角形の側筆で  
あるが、むやみに力を入れすぎると角が丸くなるので注意が必要である。

楷書も時代によってその形が変わってくるが、私たちは現代の字を見すぎているせいかどうかして  
縦長の造形になってしまふ。紀元200年の鍾繇の楷書が、隸書からの影響で横広の造形であるのに対し、造像記は真四角な形に書くと  
雰囲気が出る。今のように少し縦長になるのは唐の時代前後からである。



千思万考 よみ(千思万考)

書体=楷書



始平公造像記

かな規定 初段以上【一月十五日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

平川峰子選書

### 習い方解説 (三)

平川峰子

冬菊のまとふはおのがひかりのみ  
(水原秋桜子)

句意は、冬菊が自分から光を放つ  
ているかのように凛と咲いている。

冬菊は白い小菊と思われる。

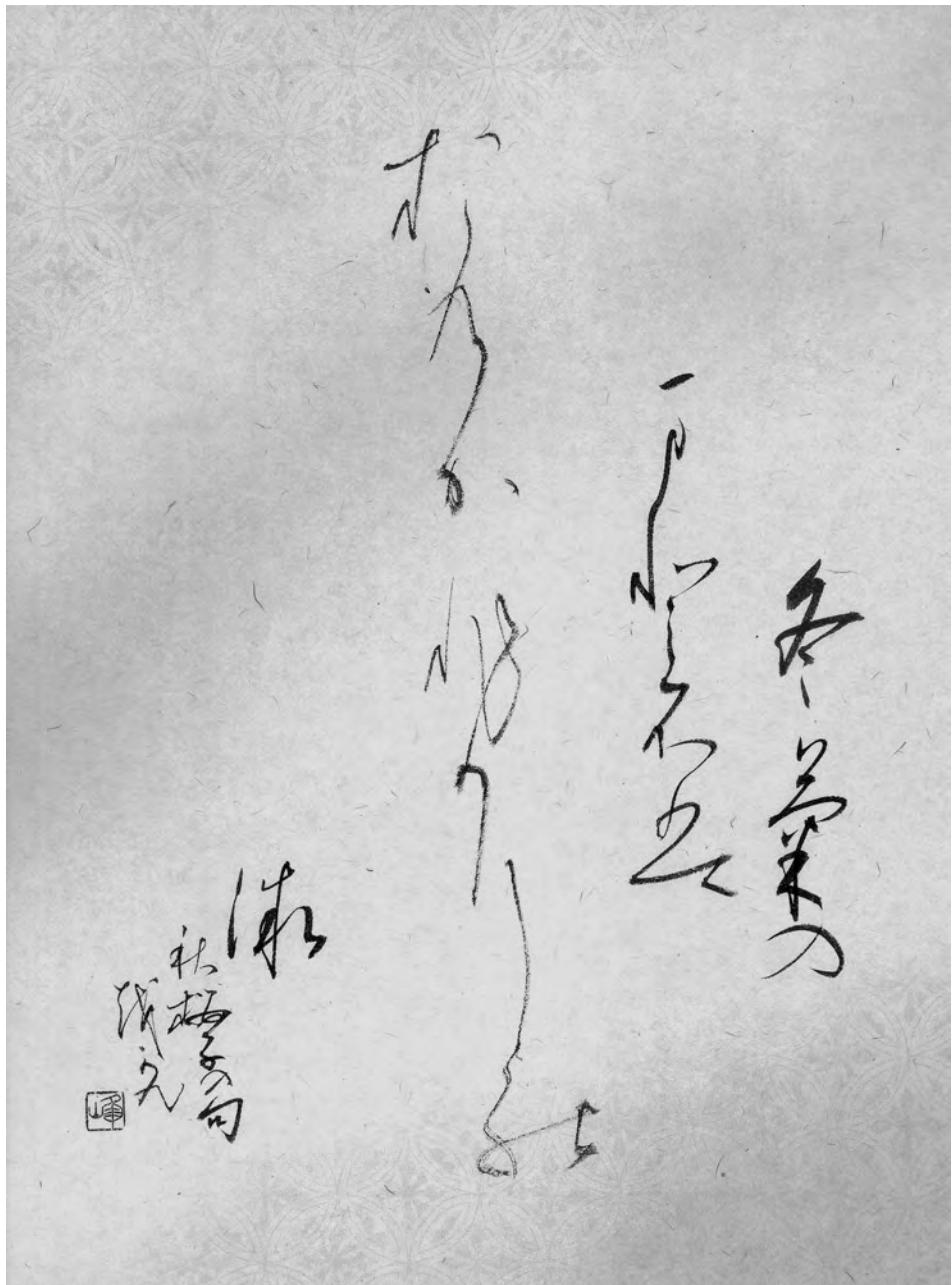
俳句をかな作品にするとき、変

体がなをなるべく少なくと心がけ  
ているのですが、今回は意識的に  
多くしてみました。置き換え可能  
な変体がなはたくさん有りますの  
で字典で調べて誤字にならないよ  
う気を付けてください。

この俳句にはのが三つ有ります  
ので、位置によってどののを使う

か考えてください。

墨継ぎは最後の微でし、全体の  
バランスを考慮して、「秋桜子の  
句をかく」と入れました。「秋桜  
子の句」だけでも良いでしょう。  
もし雅印だけにする場合は微を少  
しき目に書き、位置を工夫して  
ください。



よみ方 冬菊のま(万)と(登)ふ(不)は(盤)お(於)の(乃)がひ(非)か(可)りの(能)み(微)

秋桜子の句を(越)か(可)く(九)

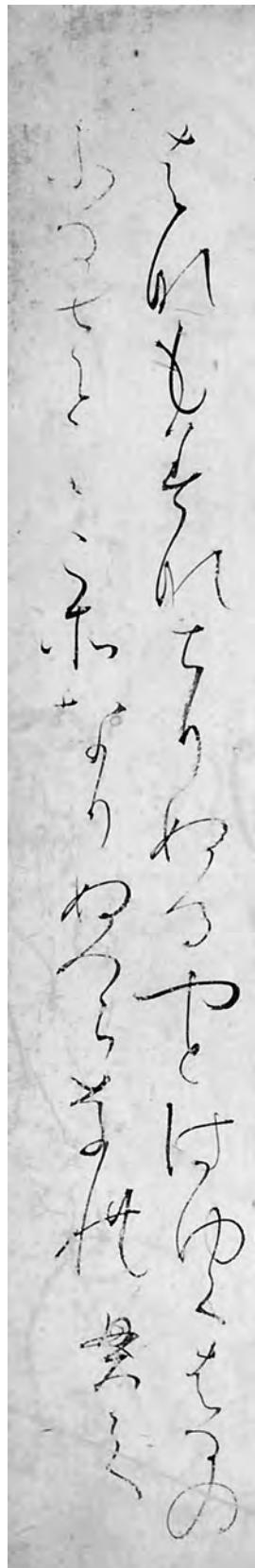
創作

かな規定 秀級以下【一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$  (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

◎四月号より課題を「粘葉本和漢朗詠集」に変更いたしました。

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集  
(掲載写真拡大111%)



よみ方 は(者)な(那)もみ(美)な(那)ちりぬるやどはゆく(久)は(者)るの

ふるさとこそ(所)なりぬべらな(奈)れ(禮) 貫之

### 習い方解説 (三)

木 村 東 舟

ゆく年やしめきりてきく風の音  
(久保田万太郎)

かな条幅規定【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

木村東舟選書



よみ方 ゆく(久)年やしめ(免)き(支)りてき(聞)く(久)風(可せ)の音

創作

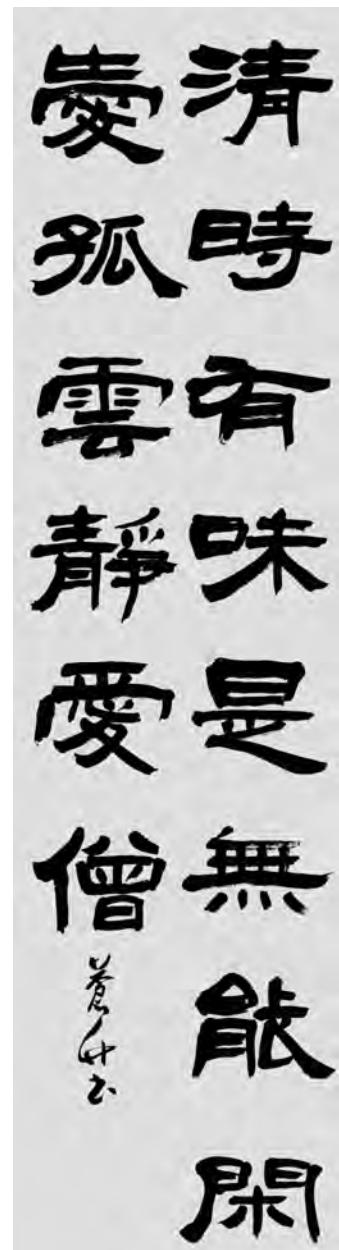
\*タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹選書

習い方解説 (三)

名 越 蒼 竹



### 習い方解説 (三)

大平邑峰選書

漢字条幅規定 秀級以下【一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

大平邑峰選書

今回は、北魏・龍門造像記の書風で書きました。同時代の鄭書とは、雰囲気が異なります。違いが表現できるよう用具や線の引き方などを前回とは変えていました。角張った線表現（方筆）による力強さを目当てにしてみました。

書体＝自由



文章均得江山助  
(王十朋)  
(文  
章  
均  
し  
く  
得  
た  
り  
江  
山  
の  
助)

前回北魏風楷書を試みたので、これに影響を与えた隸書体に挑戦してみました。八分隸を基調としていますが、謹厳・優雅の趣きは少し押さえたつもりです。隸書体では字間を広くし、行間を詰めるのが基本です。参考手本より文字の扁平さを更に強調したほうが見栄えがするように思います。もちろん一字一波の原則は重要です。

\*タテ形式に限る

習い方解説(三)

北村白琉

町の家々では、こんやの銀河の  
祭りにいちいの葉の玉をつるし

たりひのきの枝にあかりをつけたりいう仕度をして  
いるのでした。

「銀河鉄道の夜より」白琉書

宮澤賢治の童話作品「銀河鉄道の夜」は、孤独な少年ジョバンニが、友人カムペネルラと銀河鉄道の旅をする物語で、その中のほんの一節です。

ペン字を習う時に気をつけてほしいことの一番目はペンの持ち方です。人差指がペンに添ってなだらかな山型を描くように持つとよいでしょう。指先にあまり力を入れすぎないよう親指と人差指の関節が、外側に角張るような形にならないよう注意して書きましょう。

※落款(自分の名前)を必ず入れる。

用紙=はがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

ホープ作品  
各部総評 No. 678

漢字部 師範 種谷 森城

木簡帛書の風を得て、リズム感よく表現。やや硬目の筆使用か、随所に見られる破筆が効果的。

◎漢字部総評 上級4字句表現は安定した作が多かったが、草書の字形やや不安な作散見。下級楷書は多様な書風への挑戦を。(大雲評)



かな条幅部 四段 雨宮 葵遊  
少々固い所もあるが、独特のリズム感を持ち、特に墨絞ぎをした後半に大字の弾けた醍醐味がある。



◎かな条幅部総評 誤字は少なかつたが紙質に配慮して欲しい。滲みが出るものは初心者は避けて、連綿は滑らかに運びたい。(洋子評)



前衛書部 特選 丹羽美恵子

爽やかで弾力ある線が全体を引締めている。潤筆の切れ味鋭い線が輝く一作である。

◎前衛書部総評 多様な表現と意識を確認したが、最後の押印位置と大きさに心して欲しい。(蓮紅評)



現代詩文書部 特選 板橋 恵泉

文字造形が漢字仮名の調和を生み、更に墨量の変化、字間の工夫が作品に命を与える。素敵に宿る。

◎現代詩文書部総評 今回は特に余白の工夫、造形力の鍛錬が伺え意欲が漲る。

(弄石評)

ペン字部 師範 村上 和美

漢字が力強く、片仮名とよく調和している。布置も落款まで心が行き届き、明快で格調高い安定作。

◎ペン字部総評 全般的に片仮名をどう調和させるか考慮した作品が多く、良い傾向。読みやすい表現方法の工夫も一考か。(和楓評)

和美書道

漢字が力強く、片仮名とよく調和している。布置も落款まで心が行き届き、明快で格調高い安定作。

◎ペン字部総評 全般的に片仮名をどう調和させるか考慮した作品が多く、良い傾向。読みやすい表現方法の工夫も一考か。(和楓評)

かな部 師範 増田 佳子

しなやかな線が穏やかな墨色と相俟つて作者の個性を引き出した。飽きない世界を創り出して美事。

◎かな部総評 字粒の認識が悪く、紙面を使いこなせてない作品が多く残念。筆の生み出す“線のふくらみ”を意識されたし。(明子評)

漢字条幅部 師範 渋谷 愛華

懐が広く、太い直線で堂々たる風格の隸書。鄧完白や張遷碑を基礎とした独自の作風は魅力的です。

◎漢字条幅部総評 課題の文意を理解し、字典で文字を調べ、下書きで推敲を重ねた上で仕上げる。創作の手順怠らずに。(萬城評)

今月の

# 特別研究部優秀作品(特選)

前衛書 (蓮紅社)

大友紅蓉



大友紅蓉書

180×60cm

「飛翔」

臨書 (紅瑤) 須田香舟 「一条摺政集」



須田香舟 臨

45×132cm

部分拡大

◆丁寧な書きぶり、最後まで息つめて書かれた雰囲気が感じられる。 (瑞舟評)

◆原帖の微細な線情とりズムをよく観察し、的確安定した臨書態度に敬服。料紙の黄色系が映える。 (大雲評)

◆一条摺政集のシャープさを失わず書き通した姿勢に敬服。料紙の美しさとも相俟って見飽きぬ臨書。 (翠風評)

◆美しい料紙を用いて、自然な連綿で安定感のある臨書作品。素直な線で行の傾き等もよく捉えている。 (仙草評)

臨書 (森地) 東平絹子



東平絹子 臨

70×135cm

「伊都内親王願文」

◆原帖の雰囲気を捉えて上下2段によどみなくまとめた。俯仰法の特徴も見える。 (翠風評)

◆ほぼ原帖の形態通りに臨書した姿勢は基本ながら納得する作。墨色がやや甘く感じられる。紙の影響か。 (大雲評)

◆願文の特徴を理解し、スケール大きく、緩急の変化がきいた見事な臨書作品に仕上がっている。 (仙草評)

◆原帖に多く見られる俯仰法をよく研究し、ほぼ原寸で表現した臨書作。リズミカルに筆を運んだ傑作。 (瑞舟評)

◆静かな導入部から鋭角の形態を生かして飛翔のテーマに迫る。作意の少ない安定した作と思える。 (翠風評)

◆躍動する線美しい。上部の展開が魅力の作。渴筆部やや上すべりの感あり。墨の濃度の関係か。 (大雲評)

◆中央から下部へ大きく広がる展開が魅力の作。渴筆部やや上すべりの感あり。墨の濃度の関係か。 (瑞舟評)

臨書（大雲） 宮原香扇 「伊都内親王願文」

◆大字の臨書作品として見応えのある作品。思い切った潤筆部を加えると更に立体感ある作となつたか。

（翠風評）

◆俯仰法を駆使して、大胆にスケールの大きな素晴らしい拡大臨書作。

（瑞舟評）

◆原帖の俯仰の動きをポイントにスケールの大きな臨書作。潤筆部に比べ渴筆やや浮きすぎか。

（大雲評）

◆2×6尺に2行の大字臨書作品。抑揚が自在で好印象の作となっている。やや落款位置が下がりすぎか。

（仙草評）



180×55cm

宮原香扇臨

「星」



140×60cm

相内珠莉書

◆厳しい始筆、躍動感溢れる渴筆の妙、墨色もよく完成された作品となつていて。

（仙草評）

◆鋭く切り込む線情が大きく広がる渴筆と調和して冴えある作。下部の集団やや弱いか。

（大雲評）

現代詩文書（白珠） 西山葵龍書

「中原中也詩」

◆歯切れよい筆致が潤渴の変化を伴ってリズミカルな作。構成の斬新さが観者をひきつける。

（大雲評）

◆思い切った構成に作者の創意を見る。楽しく創作している姿が窺われる作。

（瑞舟評）



60×142cm

西山葵龍書

◆中央の盛り上がりを潤渴と文字の大小で表現し、軽妙な線もあり冴えある作。

（仙草評）

◆構成よく、巧みな筆使いで明るく美しい作。中央部の盛り上げがきいて躍動する筆線が爽快で魅せられる。

（瑞舟評）

◆発散する部分と凝縮する部分の調和が美しく墨色も魅力的だ。墨色の深さ、気迫に満ち躍動感も加味されて、スケールの大さに感動した。

（瑞舟評）

創作の部	漢字	前衛	現代詩文書	篆刻	漢字	前衛	現代詩文書	篆刻
かな	かな	かな	かな	かな	かな	かな	かな	かな

現代詩文書（白珠）

「中原中也詩」

現代詩文書	漢字	前衛	篆刻	漢字	前衛	篆刻	漢字	前衛
かな	かな	かな	かな	かな	かな	かな	かな	かな

総出品点数  
79点

〔創作の部〕  
〔漢字〕

〔特選候補者〕  
〔漢字〕

（瑞舟評）

〔篆刻〕  
〔漢字〕

〔漢字〕  
〔篆刻〕

漢字研究部  
(伊都内親王願文)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



高原梨秀



紅惠睦琴初翠  
雨美子燐江嶺

藤香祥節由翠  
谷織扇子子光

華淑一美睦翠  
洋子琴代月陽

鳳美彩青  
楓里香蘭

原本の「余」は、やや小さいですが、「余」(一處)のバランスを考慮に入れ、深く強い線質で軽快に4文字を表現しています。  
横画の複雑な動きもしっかりとらえ、強弱、太細を加えて、格調高くまとめあげました。

◎漢字研究部総評

「...中国の書の模倣であっても、そこに日本らしさの芽生えを見ることがあります。そ

の例が「伊都内親王願文」です。この願文は和様の先駆けといわれていますが.....」(古典に親しむ) 大野定男著)  
躍動感が豊かな表現につながります。筆を自由に操り、強さと変化に富んだ行草体を得るのは大変ですが時間の経過とともに、表現の多様性を垣間見る機会となりそうです。

か な 研 究 部  
(一条摂政集)

選評 松村くに子

今月のホープ作品

須田香舟

字形を正確に理解し、  
自由自在に動かして  
の特徴をしつかり捉え  
◎かな研究部総評  
全体には良く書かれて

字形を正確に理解し、よく見ています。ためらわず自由自在に動かしている運筆は白眉である。古書の特徴をしつかり捉えて余裕すら感じます。

◎かな研究部総評

全体には良く書かれているが、1字違っているために残念な作品が目立ちました。内容を把握して、特に省略している点画に細心の注意を払いましょう。

秀こ華明澄た花華正こ椿生光紅  
損損こ祥漢春か舞祥華だ翠大彩瑠  
加加小小梅伊板石五安新浅藍澤  
内藤藤澤川木藤毛風  
頭頸雅而輝寧悦青優代佳  
山山代佳

正千新華豆正日華田島陽春智華春正譽龍章陽久澄正

大鶴植岩岩今今伊市石石石  
木澤田渕瀬崎村井藤川橋毛川  
教李紅祥祥陽貴む英紫嘉寿晴洞乃  
教養李雨苑苑陽貴む英紫嘉寿晴洞乃

天アメニ小コトハ大タケシ若カツシ青アオシ旭ヒツキ澄アラタシ青アオシ華カツラ土トモロコ富アマミ  
障アマツシ阪アマツシかアマツシ実アマツシ松アマツシ峰アマツシ老アマツシ春アマツシ仙アマツシ氣アマツシ貴アマツシ  
中アマツシ豊アマツシ富アマツシ桶アマツシ高アマツシ高アマツシ高アマツシ高アマツシ平アマツシ鈴アマツシ杉アマツシ菅アマツシ  
里アマツシ岡アマツシ畠アマツシ田アマツシ泉アマツシ山アマツシ橋アマツシ橋アマツシ橋アマツシ橋アマツシ木アマツシ田アマツシ原アマツシ  
亮アマツシ萩アマツシ雪アマツシ靖アマツシ美アマツシ千アマツシ真アマツシ幸アマツシ杏アマツシ智アマツシ祥アマツシ風アマツシ昌アマツシ子アマツシ  
子アマツシ勝アマツシ彩アマツシ皇アマツシ婧アマツシ子アマツシ美アマツシ代アマツシ薰アマツシ惠アマツシ慈アマツシ風アマツシ

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25
26	27	28	29	30

紗白梅  
永簾艸

咏知优  
津艸子子

雅美洋

良佳心  
代泉子華

八 A や誠千も玉 街 I ま和葉く松	硯千も遊上若もう高 N 大青正た樹書正蘭竜大有颯たう紅 水葉く雲泉葉くる崎 H 雲蓮華か原游華鼎泉雲秋葵かる瑠
秀	特選
井伊伊石飯新青 上藤東崎田井木	宮戸森西早工青飯矢川磯沼蓮河早庄石川高驚石後梅今須 澤村田澤部藤木高口田貝田田野坂市川崎橋山川藤津閑田
作	知佳
芝寿京甘光藤葵 雲子雨彩雪郷	(50首) 草博藤彩 山藤幹登温清泰妙白梅咏す優雅美洋代心香 秋舟谷峰朗房漣生江子耀心永薰艸姫子泉梢子泉子華舟
高 陵 佳	東橋こ石上大椿た 玉上天も一玄やもた竹英蒼清大う正彩長大 正苑も説 伯翠だ習泉雲翠か 松泉簞ぐ宮穹まくか美峰陽月雲る華 月雲 『華書く和
會 木 作	山安宮松本堀平浜長橋中戸鶴千田鈴狼櫻斎込小草木木岸木河加加小岡難 本嶋川丸多切山野谷本村里部田葉玉木渡田藤山林刈村原田暮合藤瀬野部澤 勇介 (50首) 真か川シ 明寺 眞砂洋愛和幸承永千紅ゲ星藤雅陽哲利筐智早美嘉真順輝東典和春日久加 紀子子石枝雲子薦峰麗子子風裕子子子右舟苗伸汀華子子子散歌夏豆子舟

大游菊大京 阪水月阪橋	芳正琇竹已無高竹松菊白澄華蓮大洞白上耕秀上玉琇上童 蘭華韻美未門真美村月露春仙紅阪書珠泉雲水泉松韻泉泉	安誠竹明正澄潮や大琇こ華明澄た花華正こ椿生光紅 波和原漢華春音ま阪韻こ祥漢春か舞祥華だ翠大彩瑠
入		
生荒新天東 駒川井羽多 萩裕惠花	渡鷺吉横山山山八茂宮南增前本廣濱西中土富塚田竹高泉鉛鈴新代嶋柴齋齋岸加加加小小梅伊板石五安新浅藍 邊沼川山山根中岸木木崎田川田地田山尾井澤本中内草木木谷田田藤藤林本納藤藤澤川木藤垣毛十川澤	
還印首	二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 二十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 三十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 四十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 五十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 六十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 七十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 八十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十一 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十二 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十三 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十四 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十五 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十六 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十七 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十八 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 九十九 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み 一百 真橋 理ち 美不 つ 与 か 鳳美み	

高澄 A 八声八富春山光昌高芳樹奧大墨千大蘭黎大汐生正大東白廣黎正大青 大玉玄梅椿 正澄久澄陽龍簪正八日正千  
崎春 I 岛雪委街潭江武彩荷蘭田阪か花葉雪風大華阪向昌良明華阪峰 『 阿藻穿翠器 』 華春賀春陽泉田華巨新華華

神新清淡七箇佐佐佐佐櫻坂酒肴紺小小小小河高小小黑久北木上菅神川金金鹿小押荻尾大大大鶴植岩岩岩今今伊市石石石  
宮行水谷條野々々々田巻井藤野林林林口野武板橋泉柳保又島林野田日本子谷岡島野山原形西島木澤田潤瀬崎村井藤川橋毛川  
内由由木千木木木木奈明  
玉瑞紀美徳美芳淳町龍麗知江遊純萩晃智惠玄々美竹智春綾萩静典紫浪寿萩萩純玉紅一昌教李紅祥祥陽貴む英紫嘉寿晴  
枝華子善美子善美子白蘋子彩山國江代子子城日葉善美聲音溪代子仙希善美子光子薦霞美子善名雨蘆園光皇子乃洞